

序論

- 合同礼拝で聖餐式を行うにあたり、私たちの聖餐式は正しいものとなっているか
- パウロがコリント教会の聖餐式のやり方を厳しく叱責している箇所
- 聖餐式の本質と、受けるにあたっての心構えを学ぶ

I. 初代教会の聖餐式とコリント教会の問題

初代教会の聖餐式

- 平日も家の教会に集まり、食事・祈り・み言葉・聖餐式を行っていた
- 「主の晚餐」として夕食の中で実施(最後の晚餐に倣う)
- 愛餐(食事の交わり)と聖餐式はセットで行われていた(使徒 2:42, 46)

パウロの厳しい叱責(17-19節)

- 「あなたがたをほめるわけにはいきません」
- 集まりが「益にならず、かえって害になっている」
- 一致のない、間違ったやり方で聖餐式を行っていた

II. コリント教会の具体的な問題点(20-22節)

貧富の差による分裂

- 裕福な人々: 早めに集まり、自分の食事を食べ、酒に酔う者もいた
- 貧しい人々: 労働後に遅く到着、食事はほとんど残っておらず、わずかなパンとぶどう酒のみ
- 貧しい人々は教会内でも慘めさを実感させられていた

当時の社会背景

- コリントの街では貧富の差・身分の差が大きく、このような扱いは当たり前だった
- しかし、パウロは教会の中で同じことが行われるのは間違っていると主張

III. 聖餐の本質(意味)(23-26節)

イエス様が制定された聖餐式

- パンを裂く: イエス様の十字架の犠牲を表す
- 「あなたがたのための、わたしのからだです」: 特定の個人ではなく、召された弟子たち全員のため、身分差・差別なし
- 杯: キリストの血による「新しい契約」(恵みによる救い)

聖餐式の目的(26節)

- 個人の救いの記念だけでなく、教会という群れ全体に与えられた恵みの救いを覚えるため
- 主の死を告げ知らせ、再臨まで継続する

コリント教会の問題の本質

- 自己中心的な食事と貧しい人への配慮の欠如
- 聖餐の本質(主の愛の犠牲と教会全体への恵み)からかけ離れた行為

IV. 間違った聖餐の仕方に対する警告(27-32 節)

ふさわしくない仕方とは(27-28 節)

- 単に個人的な罪を抱えた状態だけでなく、兄弟姉妹に対する愛の欠けた状態で聖餐に預かること
- 自分自身を吟味する:個人的な罪と共に、兄弟姉妹への愛の振る舞いを吟味する

主のさばき(29-30 節)

- みからだをわきまえないと食べ飲む者は、さばきを食べ飲むことになる
- コリント教会に病弱な人や死んだ人が多かったのは、愛のない聖餐式に対する主のさばきによる

さばきの目的(31-32 節)

- 救いを失うためではなく、正しい状態に戻すための主の懲らしめ
- 自分をわきまえ、正しい聖餐の仕方に戻るなら、懲らしめも取り去られる

V. 聖餐式に関する肯定的な勧め(33-34 節)

- 「互いに待ち合わせなさい」:他の兄弟姉妹への愛と配慮を持つこと
- 「空腹な人は家で食べなさい」:愛餐は個人的な食欲を満たすためではなく、主にあって一つの群れとして恵みを確認するため

結論

聖餐の本質を心に刻む

- 聖餐は空腹を満たすためのものではない
- 主の民全体に与えられた主イエス・キリストの愛と犠牲を心に刻むためのもの

自分を吟味して聖餐に預かる

- 個人的な罪だけでなく、兄弟姉妹に対する愛や配慮ができているかを吟味する
- 兄弟姉妹が劣等感や疎外感を覚えないように配慮しているか
- 愛の振る舞いをもって主の聖餐に預かる

適用の問い合わせ:

- この教会の兄弟姉妹を愛しているか
- 兄弟姉妹への愛と配慮をもって日々振る舞っているか